リハビリ患者の95%前後が在宅に復帰―一般社団法人巨樹の会 新上三川病院・大上仁志院長に聞く◆Vol.2

2019年6月5日 (水)配信 m3.com地域版

回復期のリハビリテーションを行う北関東最大規模の病院として、地域の医療に貢献している「一般社団法人巨樹の会新上三川病院」。リハビリ患者の95%前後が在宅に復帰しているという同院が、患者のモチベーションを上げるためにどんな工夫をしているかなどについて、院長の大上仁志氏にお話を伺った。（2019年4月10日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

――貴院に入院されたリハビリの患者さんの在宅復帰率は、どのぐらいでしょうか？

ほぼ95%前後を保っています。入院中の患者さんや外来の患者さんがしっかりとリハビリを行えるよう、スタッフを十分に配置していますので、その成果が出ているのではと思います。

――貴院のドクターやリハビリスタッフの方は、何人おられるのでしょうか？

当院の常勤医は全部で12人（整形外科6人・リハビリテーション科3人・内科1人・泌尿器科1人・麻酔科1人）です。リハビリスタッフは、全員で146人（PT96人・OT36人・ST14人）です。病院の規模に比べて、リハビリのスタッフ数は多い方だと思います。なぜこれだけの人数をそろえているかというと、患者さんにリハビリをしっかりと提供したいからです。リハビリは数多くこなせばこなすほど結果が出ますからね。

「リハビリは数多くこなすと結果が出るので、スタッフの人員確保が必要です」（画像提供：新上三川病院）

当院の患者さんは1単位20分で、だいたい1日8単位以上のリハビリを行っています。本当は9単位行いたいところなのですが、患者さんの体調もありますので。1日に9単位行うと、正味3時間ですから、他の施設と比べても、しっかりとリハビリを提供出来ていると思います。

一人一人の患者さんがこれだけの時間のリハビリを行うためには、スタッフの人数が多くないとできません。そのために、リハビリスタッフが多く在籍しています。多くの患者さんは、「リハビリが十分にできる」ということで、喜んでくださっています。

――患者さんのリハビリへのモチベーションを高めるために、貴院として工夫されていることはありますか？

入院中は短期・中期・長期とスパンを分けて、患者さん一人一人と目標を共有し、その達成に向けてがんばるという方法をとっています。最終的には家に帰って自立した生活を送るというのが長期目標ですが、そのために例えば、

まずは「屋内移動の獲得」という短期目標を立て、次いで「屋外移動と家事動作の獲得」という中期目標を立てるといった具合です。

一つずつ目標を達成していくことで、高いモチベーションを保ちながらリハビリを行うことができます。

また自宅復帰後の対応ですが、退院後はどうしても患者さんにより運動量に差が出やすくなってしまいます。できる限り多くの方に運動習慣を継続していただくため、入院中の間に自主トレーニングの指導や、動作指導等も積極的に行っています。

――貴院には「関節専門外来」もあるそうですが？

ええ。関節専門の医師が在籍しており、膝関節を中心に股関節、上肢関節などの外来診療を行っています。専門医が診察の上、関節機能改善のためのリハビリを行ったり、症状によっては外科的な手術を施す場合もあります。

リハビリで活用しているトレーニング機器（画像提供：新上三川病院）

それぞれの関節疾患に対して、定期的な評価まできっちりと行うので、安心して診察を受けられると思います。関節専門外来は、近隣の方だけでなく、茨城県などからも患者さんが来られていますね。

人工膝関節置換術の手術風景（画像提供：新上三川病院）

――いま貴院の正面玄関前を工事中のようですが？

外来のスペースが手狭なので、増築をして待合室などのスペースを広げようと思っています。それに伴って、MRIをもう一台導入する予定です。外来部門の増築スペースの一部は、2019年9月から利用できるようになり、全体の工事が完了するのは2019年11月を予定しています。

外来スペース増築後の新上三川病院完成イメージ図（画像提供：新上三川病院）

――貴院が特に力を入れておられることはありますか？

当院は職員教育に特に力を入れております。これは巨樹の会グループ全体の大きな特長でもあるのですが、教育は非常に重要だという認識を職員全員が持っています。職種ごとの勉強会をよく開いていますし、患者さんの検討会などもやっています。医療の新しい知識を取り入れるだけでなく、新人の教育も含めて、基礎的なことをもう一度復習するという教育もやっています。

――最後に、「手には技術、頭には知識、患者様には愛を」という貴院の理念について、改めてご説明ください。

巨樹の会全体の理念なのですが、当院も朝礼で毎回この言葉を唱和しています。常に技術と知識を磨き、愛をもって患者さんに接することで、医療の立場から少しでも日本人の幸せを増やしていけたらと思っています。

◆大上 仁志（おおかみ・ひとし）氏

1958年山口県柳井市生まれ。1983年に栃木県の自治医科大学を卒業後、故郷の山口県に戻り、山口県立中央病院をはじめ県内の総合病院で整形外科医として勤務する。1992年に再び栃木県に移り、自治医科大学大学院に入学し、筋骨格疾患学を専攻。修了後は同大学病院整形外科に勤務し、1997年に上三川病院（現・新上三川病院）の院長に就任。2000年から3年間は自治医科大学病院整形外科で研さんを積み、2003年に再度上三川病院の院長を務め、現在に至る。

取材・文／伊藤 樹理